

令和3年8月31日

令和2年度 特別の教育課程の実施状況等について

都・道・府・県		
学校名	管理機関名	設置者の別
神戸大学附属小学校	神戸大学	国・公・私

1. 特別の教育課程を編成・実施している学校及び自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学校名	自己評価結果の公表	学校関係者評価結果の公表
神戸大学附属小学校	https://www.edu.kobe-u.ac.jp/hudev-akashie/kenkyuu.html	

2. 特別の教育課程の内容

(1) 特別の教育課程の概要

神戸大学附属小学校は、平成25年度から4年間、そして、平成29年度から3年間の計7年間、文部科学省研究開発学校として、「幼小一体」を目指し、教育課程特例を受けてきた。その研究を継続し、①6歳、7歳前半（小学校第1学年、第2学年の前期）の教育において、「小学校学習指導要領」における教科等の内容を包含し、かつ、幼稚園での学びを活かし、初等教育要領の観点である54の資質・能力で編成した教育課程を実施する。②7歳後半（小学校第2学年後期）の教育において、「小学校学習指導要領」の「各教科等」に加え、英語に親しむと共に、広く「せかい」のあり様に子ども達が触れ合うことを重視するため、「せかい」領域を新設した教育課程を実施する。

(2) 学校又は地域の特色を生かした特別の教育課程を編成して教育を実施する必要性

神戸大学附属小学校は、神戸大学附属幼稚園と同じ敷地内にある施設分離型幼小校園であり、一貫した教育の実現を目指している。上記の通り、平成25年度から計7年間、「幼小一体」を目指した研究を進めてきた。その研究の中で、幼小の教員で子ども達を育むとき、両校園独自の54の資質・能力を幼小共通のものさしとして使い、子ども達の学びを見取り、支援することが効果的であること、9年間で2つの発達のみとまり（「初等前期（3歳～7歳前半）」、「初等後期（7歳後半～11歳）」）とし、「初等前期」は「資質・能力カリキュラム」、「初等後期」は「教科等カリキュラム」で構成することが子ども達の発達に合うことを成果として見出してきた。これらの成果を上げた取組を継続、発展するために特別の教育課程を編成して教育を実施する。

(3) 特例の適用開始日

令和2年4月1日

令和3年3月31日 廃止

(4) 取組の期間

令和3年3月31日まで

3. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- ・計画通り実施できている
- ・一部、計画通り実施できていない
- ほとんど計画通り実施できていない

(2) 実施状況に関する特記事項

令和元年度において課題となっていた「資質・能力カリキュラム」による指導と「教科」による評価との整合性を担保するために開発に取り掛かっていた「資質・能力カリキュラムに対応した指導要録」は、十分運用可能なところまで開発が至らなかった。

さらに、令和元年度末以来の新型コロナウイルス感染拡大防止への対応のため、令和2年3月の政府の要請による一斉臨時休業、政府の緊急事態宣言による4月から5月末までの臨時休業といった長期にわたる休業を余儀なくされたことから、学校再開後は、学校での安全と指導の充実を図るため活動時間の確保が最優先で求められたことにより、令和2年度においては、一部計画を変更せざるを得ず、また、本件申請内容を実施するための十分な研究体制を構築することができなかった。

以上の課題から、当初予定していた1年生、2年前期の資質・能力に基づいた単元のうち、その一部は限定的な実施となった。

(3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- 実施している
- ・実施していない

4. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している学校の教育目標との関係

本特例は、6歳、7歳前半を幼稚園と同じ「資質・能力カリキュラム」で構成し、5歳後半から7歳前半までを「接続期カリキュラム」とすること、また、2年生後期では「せかい」領域を新設することで、本校の教育目標である「国際的視野をもち未来を切り拓くグローバルキャリア人としての基本的な資質を育成する」の実現を目指すものである。「資質・能力カリキュラム」による実施は、前述3. に記述したとおりで附属幼稚園との交流単位での実施となったが、1年生にとっては、年下の友達との関わりについて考える機会となり、同じグループで活動した子供達は互いに親しみを感じたり、5歳児にとっては附属小学校への入

学に期待感を持ったりする姿が見られた。少ない時数での実施ではあったが幼小接続期の子供達にふさわしい経験となった。また、2年生の後期では、JETとALTによる「せかい」領域を予定通り実施した。カリキュラムの特徴として、広く「せかい」のあり様に子ども達が英語を通して触れ合う活動を重視したことから英語に親しむ姿が多くの子供達に見られた。

（2）学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

神戸大学附属小学校と神戸大学附属幼稚園は、兵庫県明石市を中心とした兵庫県全域の幼稚園、小学校の教員研修の中核を担うために、研究発表会や研修会等を開催してきた。特別の教育課程を編成して教育を実施することで、幼稚園と小学校教育の連携の一つの形を地域の学校へ発信することができると考えている。幼小の教師への効果としては、展開案の検討をする中で、資質・能力についてのとらえ方や、教師の援助の意図の表現の仕方について議論したりして、互いの考えを出し合い、学び合うことができた。また、実践を通して、幼稚園の教師は6歳児の、小学校の教師は5歳児の姿から、その学びについての知見を得たり、必要な援助について考えたりする機会となった。

5. 課題の改善のための取組の方向性

「資質・能力カリキュラム」においては、これまで積み上げてきた知見を維持・発展させるために「教科」による評価との整合性を検証していかなければならない。また、「せかい」の学習においては、中学年の外国語活動、高学年の教科としての外国語をさらに系統的に繋いでいく必要がある。